

富山高校物語Ⅸ 生徒・同窓生と教員の深い絆を表す銅像

赤松の庭の中央にある教員の銅像は、生徒・同窓生と本校教員の絆の深さを表しています。

本校教員として長年奉職した齋藤八郎(嘉永2年(1849)～大正11年(1922))は、若くして新潟で漢学を学び、上京後に英語を学びました。幸田露伴の弟子となり、内務省に翻訳官として仕えましたが、上司を諫めたことから職を退き、教育を志し、自ら東京に私立学校を設けました。

明治29年当時、富山県は識見が高く、豊かな教養ある教員を求めており、探しあてたのが齋藤八郎でした。齋藤は47歳になっていましたが、富山中学に一生を捧げ尽くす覚悟をし、範を垂れる意味で禁酒・禁煙し、言行一致で教育に当たったと言います。

富山中学では、修身・漢文・英語を26年間教えました。学識豊かで、私心がなく、信念と真心に満ちた言動は、強く生徒を惹きつけたそうです。

「ふだんは柔和な慈愛に満ちた温顔であった。たまに生徒の不心得に怒髪天をつく勢いで叱責されたり、双眼に涙しながら訓戒されることがあり、日頃の猛者たちでさえ震えあがって拝聴した」(『富中富高百年史』p186)とあります。

卒業生7回生から38回生まで全員に、『大学』『中庸』など四書五経を細字で筆写した巻物を贈与していました。同僚の多くの教員も感化されたといえます。死の直前の大正11年まで奉職されました。



齋藤八郎先生 銅像

戦禍を超えて 銅像を蘇えらせた同窓生の思い

在任中の大正6年に同窓生が建立した銅像は、戦時中にやむなく金属供出に付されることとなりました。その際に同窓生たちは、銅像を元に石膏像を造って保管しました。戦後の昭和25年に資金を出し合い復元したのが、現在の銅像です。恩師を思う深い思いが、銅像を再び蘇らせたと言えます。

石膏像は、恩師を思う気持ちと、戦争の歴史の証人として百周年記念館に保管されています。